

砂時計は返らない。

1mm

手紙をもらった。

桃色の封筒。白い便箋、左下に浮き出しの桃花。

今日の天気のこと、街の様子、新発売のケーキのこと、蕾を付け始めた樹木のこと。

結びに、「花が咲いたら、 」、

ぼんやりと文面を目でなぞって、また封筒に戻す。

仕舞おうと無意識に開けた引き出しには、たくさんの封筒が並んでいた。特に気にせず、その最前に差し込んで。

ぱたりと、引き出しを閉める。

広い部屋に、ひとり。でも寂しいとは感じない、いつも、何だか優しい心地に包まれているような。ずっとここにいる。何でか、なんて、考えたことは多分ない。

ゆるり、ゆるりと、ただ過ぎていく日々を、想うことも思い返すことも無く。

春の陽気は暖かくて。

椅子に座って窓の外を見ていると、いつの間にかうたた寝してしまっていた。

結びに、「花が咲いたら、 」、

雑貨屋のことを「懐かしい」と書いてあるが、自分にはその場所での思い出がなかった。ちょっとだけ残念に思いながら、封筒に戻す。

仕舞おうと無意識に開けた引き出しには、たくさんの封筒が並んでいた。特に気にせず、その最前に差し込んで。

ぱたりと、引き出しを閉める。

今日は、暖かいけれども風が少し冷たく強い。窓を閉めておこうと手を伸ばすと、ふと、誰かの言葉が脳裏に浮かんだ。

(「桃色が、やっぱり、似合うね」。ちょっと笑っているような声で)ぽつりと。

それが誰の声なのか何に対しての言葉なのか、分からなかったけれど。少しだけ、泣きたいような悲しさになった。

窓を手早く閉めて、タオルケットを頭から被って丸くなる。何か考えなければいけないような、忘れたままの方がいいような、うやうやと、思考の糸が絡まっていくけれど。

そうしているうちに、しかしいつの間にか、意識は落ちていた。

*

手紙をもらった。

白い封筒に白い便箋、透かし模様の桃花。

今日の天気のこと、街の様子、ネックレスを買ったこと、蕾を付けている樹木のこと。

結びに、「花が咲いたら、 」、

そして、その文面にあったネックレスが同封されていた。包んでいる袋から取り出してかざすと、綺麗な光を宿した。少しの間見とれて、何となく、これは毎日身に付けておこうと思った。便箋だけを封筒に戻す。

仕舞おうと無意識に開けた引き出しには、たくさんの封筒が並んでいた。特に気にせず、その最前に差し込んで。

ぱたりと、引き出しを閉める。

陽気が、さっきまでは暖かく感じていたはずなのに、何だか少し暑くなってしまったように感じた。

嬉しい。

(……何が?)

深くは考えられなかった。考えようとする、いつもうやうやとなる。

(いつもって、)

(……いつだろ)

引っ張られるように、まどろみに沈んでいった。

*

お客様が来た。

「こんにちは」

ふんわりとした笑顔がとてもとてとても綺麗なお姉さん。誰か分からなかったのでも首を傾げると、その笑顔は寂しそうなものになってしまったけれど、それも少しの間だけだった。

お客様だから、お茶の用意をする。どうぞと並べてテーブル向かいに座ると、お姉さんはまた綺麗に笑ってくれた。

お茶を楽しみながら、お姉さんが色んな話をする。今日の天気のこと、街の様子、今一緒に食べているお菓子のことや違うお菓子のこと、鳥のこと、季節の花のこと、蕾を付けている樹木のこと。

その後、長めに口を噤んで。

「……似合ってる、綺麗だね。よかった」

何のことかすぐには分からなかったけれど、視線を辿って気付く。身に付けている、硝子細工のネックレスだった。

「付けてた方がいい気がしたから」

「……そっか」

ありがとう。うれしい。

小さく零された言葉はちゃんと聞こえた。

(このお姉さんがくれたものなのかな?)

「ありがとう、」

そう思ったからお礼を言ったら、……お姉さんは、すごく驚いた顔をして。

「……うん。」

泣くのを我慢しているような笑い方で、それだけ返してきたから。

……分からないけれど、自分も、泣きたくなってしまった。

*

手紙をもらった。

白い封筒に白い便箋、透かし模様の桃花。

今日の天気のこと、街の様子、昨日のこと、蕾を付けている樹木のこと。

結びに、「花が咲いたら、 」、

(昨日……昨日、昨日、)

(あ、)

(お茶会。お姉さんだ)

思い出せたことにほっとする。ネックレスは、今日も身に付けている。
何だか、少しだけ胸が痛んだ。

(……?)

考えられはしなかったから、すぐに止んだけれど。

便箋を封筒に戻す。

仕舞おうと無意識に開けた引き出しには、たくさんの封筒が並んでいた。特に気にせず、その最前に差し込んで。

ぱたりと、引き出しを閉める。

「……。」

眠ろうと瞑った目から、一筋だけ涙が出たけれど、何が悲しいのかはやっぱり考えられなかった。

*

手紙をもらった。

桃色の封筒。

「……、」

そっと手に取って、開封しようとして、……開けることが、できなかつた。

よく分からないけれど、

(……。)

頭からタオルケットを被って丸くなると、条件反射のように涙が出てくる。

理由なんて、分からないのに。ただただ、悲しい気持ちだった。

そしていつも、それを遮るように、意識が重く沈んでいく。

(……いつも、?)

(……いつも。いつも……いつ……?)

「……、わかんない、」

「……うん。」

ごめんね。

遠くなった意識の上の方で、そう答えた誰かに、頭を撫でられたような感覚がした。

*

手紙をもらった。

白い封筒に白い便箋、透かし模様の桃花。

その真ん中に、綺麗な字で、たった一文。

「花が咲いたよ。」

「花が咲いたよ」

まるで手紙を読み上げたかのような声に、振り返る。

と、目前に、溢れるほどの、満開に咲いた桃の花――。

「……わ、すごい。綺麗」

「でしょ？」

思わず緩んだ顔をそのまま上げると、そこには、幼馴染がいた。

ゆうわりと笑んで、花をそっと撫でる。

「今年も圧巻だよ。ごめんね、一部しか持ってきてあげられないけど」

「謝ることない、嬉しいよ。いつもありがとう」

「……うん、」

本当に嬉しかったからそう告げると、その人は何故か泣き笑いで。

「どう、したの？」

「ん。何でもないよ。ただ、すごく、嬉しいだけ」

普通に、話せることが。

「……？」

よく、分からなかったけれど。

そう言って、ほんの少しの間、抱き締めてきたその人の行動が、何だからか知らないなあと、ただぼんやり考えていた。

肩に顔を埋めて、小さく呟かれた「ありがと、だいすき」の言葉には、答えずそっと目を伏せて。

*

*

手紙をもらった。

桃色の封筒。白い便箋、左下に浮き出しの桃花。

今日の天気のこと、街の様子、咲いた桃の花のこと。

結びに、「来年また花が咲いたら、会えることを祈って。」

それがどういうことか、分からなかったけれど。

ぼんやりと文面を目でなぞって、また封筒に戻す。

仕舞おうと無意識に開けた引き出しには、たくさんの封筒が並んでいた。特に気にせず、その最前に差し込んで。

ぱたりと、引き出しを閉める。

広い部屋に、ひとり。でも寂しいとは感じない、いつも、何だか優しい心地に包まれているような。ずっとここにいる。何でか、なんて、考えたことは多分ない。

ゆるり、ゆるりと、ただ過ぎていく日々を、想うことも思い返すことも無く。

春の陽気は暖かくて。

椅子に座って窓の外を見ていると、いつの間にかうたた寝してしまっ

ていた。

*

(また、来年、)

(鮮やかな君に会いに行くから、)

どうか、どうか、また思い出して。

*

3427字。